

7-12

特養が小学生の寄り道先になれるか？

特別なところでない特別養護老人ホームへ

世代間交流

レクリエーション

特別養護老人ホーム 神明園

発表者：役務部生活支援係 長川吉仁	共同研究者：業務連携部生活相談係 大内健史
所在地：東京都羽村市神明台 4-2-2	共同研究者：役務部生活支援係 濱中ゆり
TEL：042-579-2711	E-mail：info@sinmeien.or.jp
FAX：042-579-6868	URL： http://www.sinmeien.or.jp

今回の発表の施設 またはサービスの 概要	東京西部に位置する羽村市（人口約5万6千人）に、市内3番目の特養として平成11年に開設し、今年で11年を迎えました。『楽しみ』『くらし』～そして『よろこび』を理念に掲げ、身体介護のみに終始しない生活援助の実践を目指しています。
----------------------------	---

◆ 取り組んだ課題

- 神明園理念にある“地域に開かれた園づくり”の一環として、日頃特養へ足を運ぶことがない地域の方々へ理解を深める。
- 子供たちの口を使ってその親の世代に社会資源としての特養の存在意義を伝えてもらう。
- 学校での催し（学芸会や演奏会の一部）を特養に持ち込んでもらう、という方法以外に個の入居者と密なかかわりの機会を提供し、ボランティアとは意味の異なる人間関係の構築はできないか？

◆ 具体的な取り組み

- 学校への働きかけ
 - ・交流を通じたギブアンドテイク
 - ・音読の宿題を、入居者を相手にできないか？
 - ・図工などの授業に、入居者が参加することはできないか？
- 交流に参加した生徒へのフォロー体制
 - ・名前を呼び合う関係の構築
 - ・ハンディを持った人への偏見の払拭
 - ・老化という自然の理に対する感覚的理解
- 保護者との意見交換
 - ・生徒へのフォローを保護者の視点でもフォローしてもらう。

◆ 活動の成果と評価

- 学校側とどういった形で交流会を行うかと詰めたところ、授業とは切り離し、自主参加の放課後校外活動といった位置づけ（名称：タウンワークス）で実施することとなった。
- 開催は下半期において、月1回ペースの全6回。参加対象生徒は2、3、4年生の保護者が同意した児童とし、1回あたり20～30人（平均25人）の受け入れを行った。
- 参加した児童からは「来年も来たい」「楽しかった」と概ね良好な感想を得たが、一部の児童にとって、高齢者とのコミュニケーションが大変だった様子もあり、職員の適切なかかわりを必要とする場面が散見された。
- 参加した児童の保護者からも、有意義な活動であったとの評価を多数いただいた。
- かかわった入居者からは、「また来てほしい」といった声も多く聞かれたが、「疲れる」というネガティブな反応もあった。

◆ 今後の課題

- 学校側の人事異動により、担当した教員がいなくなると、築いてきた関係性が振り出しに戻ってしまう恐れが高い。
- 小規模の交流と考えていたが、参加人数が多くなってしまったことにより、学校と園双方に実施時の負担が大きくなってしまった。
- 学校を介在しない関係を作ってゆくために、小規模な取り組みを負担なく継続的に行う方法を考慮する必要がある。
- 全6回終了後、参加児童の保護者との直接会談ができればよかった。

【メモ欄】